

●東洋大学社会福祉学会 第10回大会／2014年8月

【記念鼎談Ⅱ】

『東洋大学で学んだ研究者としての基礎』

登壇者：和気純子（首都大学東京教授）、寺田貴美代氏（新潟医療福祉大学准教授）、熊田博喜（武蔵野大学准教授）
司会者：稲沢公一（本学ライフデザイン学部教授、本学会会長）

進行係：それではそろそろ時間になりますので、鼎談のほうを進めさせていただきたいと思います。記念鼎談の2番目のほうになりますけども、『東洋大学で学んだ研究者としての基礎』というタイトルで鼎談を進めさせていただきたいと思います。20ページのところに和気先生のプロフィールがあるんですけども、1998年のプロフィールの所が、東京都立大学人文学部社会福祉学会専任講師というふうになってまして、学科ということだと思いますので、ご訂正いただければと思います。

それではここからの司会は会長の稲沢先生のほうにマイクをお願い致しまして進めていただければと思いますので、よろしく申し上げます。

稲沢：先ほどに続きまして、また稲沢です。よろしく申し上げます。先ほど若干お尋ねしたんですが、特に内容を詰めたわけでもなくあれぐらいでいいよねっていうことで、お一人ずつ15分とかではなくて、幾つか質問を投げ掛けながら回ってグルグルやろうというふうには思っています。

先ほどのお話を伺って今回の鼎談を書く、テーブル起こしをすとか紀要に載せるとか言われて、え、いきなりそれはないだろうなと思ったんですが、紀要に載せられる範囲の話でいきたいというふうに思っていますので。

それでは最初に、どうして東洋大学の大学院に、大学院につながったのか。で、この人を先生として、そのゼミに入るようになったのかっていういきさつみたいところから伺いたいと思いますので、早速ですが和気さんからお願い致します。

和気：皆さんこんにちは。私は和気純子と申します。3人の中で多分一番古手です。そのため一番最初

に配置されているのだと思います。私は東洋大学大学院の博士後期課程から入り、93年に入学致しまして、96年に修了致しております。

会長を務めておられる稲沢先生とは同じゼミで、実は年齢は何歳か下ですけども、稲沢さんよりはゼミ的には1年先輩ということで、上下関係をととき意識するようにしています。

まずは自己紹介と、それから東洋大学に入ったきっかけをお話しさせていただきます。私は東京女子大で社会学を学んでいたんですけども、そこに社会福祉学科はなく、私も大学よりは社会勉強を中心にやっておりましたので、あまりいい学生ではなかったのですが、社会学を学ぶなかで非常勤の先生として副田義也先生、副田あけみ先生、山手茂先生など、後々深く関わることになる社会福祉学関連の先生と出会うことになりました。しっかり勉強しないのにもかかわらず、問題の分析ばかりをやっている社会学に疑問を感じていたときに、たまたま先ほど古川先生のほうからお話がありましたけれども、窪田暁子先生が1年間非常勤で来られていました。

その窪田先生の授業を受けて初めて、自分のやりたいことはこういうことだったんだとほんやりと気がつきました。それで、授業の後に先生のところに行って医療ソーシャルワーカーになりたいのですけれどもという相談をしたのが、この世界に入るきっかけです。

窪田先生はいろいろアドバイスしてくれた記憶はあるんですけども、具体的なアドバイスは覚えてないんです。ただこの先生は他の先生方と異なり、言葉に血が通っているように感じられ、それがこの道に進みたいなというふうになるようになったきっかけです。

でも先生の言うことも聞かずに、卒業してアメリカに留学することになりまして、もともと語学が好きだったため、知り合いのアメリカ人の家庭に2年間居候させていただきながら、ワシントン大学という所でソーシャルワークを学ぶことになり、そこが私のソーシャルワーク研究の原点になりました。

その大学にたまたまマーサ・オザワ先生という日本人の先生がおられ、その先生の関わりのなかで日本から先生が何人か来られたりする交流があったので、帰国後、先生がたからアドバイスを受けながら日本できちっと社会福祉を勉強したことがないので、まずは全国社会福祉協議会で2年ほどお世話になりました。全社協では、当時老人介護の国際比較という大きなプロジェクトがありまして、そのプロジェクトのお手伝いをしているうちに東京都老人総合研究所という研究機関から誘われて就職いたしました。

そのときは分からなかったんですけども、佐藤豊道先生が91年に転出された後にちょうどポジションが空いているということで、その席に入れさせていただいて、佐藤先生の研究を引き継ぐような形になりました。

研究所は非常に学際的な、当時はかなり先進的な研究をしていたんですけども、一方で事例研究はやってはいけないというような、研究方法論上の縛りが非常に厳しいところで苦労しました。研究費をもらって研究している以上は数量的な処理を行う「科学的」「説得力のある」研究が必要であるという考え方が強く、また学際的な機関だったので心理学とか精神医学、社会学とか保健学の出身の方々と日常的に一緒に研究をする中で、統計的な手法を用いた研究で科学的に寄与しなければいけないというふうに言われ、それをやることになったんです。

自分としてはソーシャルワークの研究をしたいと思っている中で、研究者のアイデンティティーがゆらぐ時期もあり、また職場が、佐藤先生はご存じなんですけども、人間関係が複雑でストレスフルな部分がありました。狭いブースを本棚で仕切って研究してるような所です。私はまだ20代の駆け出しだったんですけども、そんな所に身を

置きながら、結構ストレスも感じていました。

そのときにたまたま窪田先生が都立大学から東洋大学に移られたという話を聞き、もう一度窪田先生のもとでしっかり勉強していきたいと願い、当時板橋に職場があったんですけども、いつも時間休をとって大学院に行かせていただいていた。仕事をしながら研究なさってる方も多いと思うんですけども、職場との両立が非常に大変だということは、本当に身にしみえてよく分かります。

当時まだ大学院が少なく、特に修士課程から続けて入るとい文化が強かったので、博士課程からなかなか受け入れてくださるところが少ない時代だったんですけども、東洋大学だけは非常に自由で懐が深い大学院でした。

窪田先生ももちろん快く引き受けてくださりまして、入学する前の1年間はもぐりで授業に出させてもらっていて、その後試験を受けて博士課程に入ることになりました。

その後、博士論文を書いた後、アメリカに半年ほど行く機会が与えられたり、育児休業等で休んだりしていましたが、都立大学に行くことになりまして、今日に至っています。東洋大学とそれから都立大学、非常に不思議な関係の中で両方の大学に非常にお世話になりながら今までやってきているというところが、私の自己紹介になります。

稲沢：ありがとうございます。業績の一番上にある「高齢者を介護する家族」というのが、博士論文をそういうふうにして書かれたと思うんです。パス解析とかね。当時としてはすごい珍しいのを使って書かれてるんですけど。そういうのが。じゃあ次、寺田さん、お願いします。

寺田：はい、ありがとうございます。まず初めに窪田先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。私は、大学院の博士前期課程が社会学専攻であり、誠に恥ずかしい限りですが、博士後期課程に入ってからソーシャルワークの基礎を学んだような状態でした。

そのため、博士後期課程入学後に、窪田先生の

博士前期課程向けの授業に出させていただいたのですが、とても温かく接してくださいました。ほとんどソーシャルワークをわかっていない私がお邪魔していても、少しも嫌な顔なさらず、むしろとても温かく教えていただきました。そのため、私にとって現場の話を直接伺ったのは窪田先生が初めてであり、いわば、ソーシャルワークとの初めての出会いでした。その時のことは、本当に最近の出来事のように覚えています。

また、当時の私は、社会学専攻から社会福祉専攻に移ったばかりで、どうしても考え方やものの見方が、社会福祉学からずれてしまいがちだったのですが、それにもかかわらず主査を引き受けてくださった園田先生は、間口が広いというか、幅広い研究の機会を与えてくださったので、大変ありがたかったです。そのような経緯で、博士論文の主査は園田先生、副査は古川先生と佐藤先生にお引き受けいただきました。

ただし、社会福祉学の博士後期課程で学んだと言っても、私の基本が社会学ですので、卒業後の就職はとても厳しい状況でした。もちろん社会福祉分野も甘くはありませんが、社会学で研究職に就くことはより一層厳しく、自分は将来、就職できないのではないかという焦燥感を抱くこともありました。そのような時に、天野先生と森田先生が就職先をご紹介くださり、初めての専任教員の職に就かせていただいたことを今でも本当に感謝しています。そちらに6年間ほど勤めさせていただいて、その後、山手先生と園田先生のご紹介で現任校に着任し、現在に至っております。

また最近では秋元先生のゼミに出させていただいたりとか、福祉社会学会で須田先生や加山先生にお世話になったりなど、本当に東洋大学の先生にはお世話になってばかりで、心から感謝しています。

稲沢：ありがとうございます。寺田さんが言った園田先生という先生なんですけれども、東大で保健社会学、医学部の中で保健社会学を担当されていて、定年でお辞めになった後東洋に移られて、70までお勤めになったんだと思うんですね。その間に寺田さんとか、これから話をしてもらう熊田さ

んなんかも顔を出していた所なんですけれども、そういう所。確かに間口は広いですね、あの人は。

須田先生なんかは東大で指導を受けて医学部に行くことになったりとかしてしますので、そういう点もあったということですね。じゃあ熊田さん、お願いします。

熊田：熊田と申します。どうぞよろしく申し上げます。私のプロフィールを見ますと、22ページの所に記載させて頂いていますが、東洋大学には1990年に入学して学部、大学院、それからあと、大学院を単位取得退学してから武蔵野大学という大学に、今勤めています。併せて東洋大学には非常勤講師にお声掛けをいただきまして、もう足掛け20年近くご指導いただいているという状況になります。

もともと大学院、先ほどの第1の鼎談のところでお話があったんですけれども、私が入学した時に応用社会学科になりますので、まだ社会福祉学科になっていませんでした。私の記憶が間違いでなければ、私が3年生の時に学科になったと思いますので、そういう意味では応用社会学科の最後の入学世代という形になると思います。

ちょうど私が応用社会学科に入ったとき、社会福祉専攻には当時1年のときからゼミというのがありまして、そのときに4ゼミが開講されていました。1年生4ゼミ、2年生4ゼミ、3年生4ゼミ、4年生4ゼミということで、全ての先生がゼミを開講してるという形ではなくて、当時は4人の先生のゼミが開講されていたのですが、私が1年に入ったときにご担当だった先生が、記憶が間違えてなければ、まず天野先生、それから山下袈裟男先生、それから山手先生、そして今回第1部の基調講演でもお話が出た窪田先生でした。私は窪田先生が1年の時に教えて頂いた先生になります。

ただまだ1年生でしたので、援助の神髄などが当然分かるはずもなく、当時厳しい先生だなという印象は持ちました。主に取り扱った内容というのは前半が社会福祉の歴史、後半が確か関心のある社会問題について報告するというような内容を1年のときに取り組みました。私が2年に進級したときに古川先生がご着任をされて、確か2年の

ときが、これも記憶が間違っていなければ、古川先生、あと窪田先生、モーゼス・バーグ先生、それからあと大竹先生という先生が、確か2年のときにご担当でした。

で、私は古川先生をゼミで選択したということが私の人生の中で非常に大きな出来事でした。この出会いがなければ今このように話をさせて頂くこともないと思いますし、そこで先生からの薫陶を受けるきっかけを得ました。2年生のゼミのテーマは確か歴史の国際比較研究でした。

そのときに、今でもちょっと忘れられないエピソードがあります。そのときに、私の学部のと同期にA君という人が居まして、A君が当時イギリスの歴史の担当だったんですね。で、イギリスの歴史を担当ということでそのA君がイギリスの歴史の報告をしたときに、古川先生からそのときお叱りを受けていました。

で、私は何を怒っておられるのか全く理解できませんでした。ちゃんとイギリスの歴史を報告してるのにと思ったときに先生が「なんの本を使っているのか」というようにおっしゃられて、そのときにA君は高島進先生の本を使っていたのですが、そのときに怒られる理由がすごく僕は印象に残っています。それが衝撃でした。イギリスの歴史を報告するのであれば、何を参考にしても同じだろうと思っていました。ただそのときに、そういえば学説があるというか、歴史には歴史観があるということを知った瞬間でした。

で、やはりゼミでは古川先生、厳しいご指導でしたが、一方、お酒を飲みに行くときは優しい先生でした。当時私はお金がなかったんですけども、そのときに先生がかなり学部の学生でもすごくお付き合いいただいて、結構飲み連れて行っていただきました。その際にいろいろ先生のお話を伺っているうちに面白い先生だなと、思いました。

3年生では古川先生のゼミは開講されていなかったのですが、学部4年になったときに古川先生のゼミが開講されていたので、ぜひ受講したいということで取りました。

大学院に進学も、古川先生との出会いが大きかったです。当時は公務員になろうと思っていて、ある自治体の公務員を受けて内定が決まっていた

ので、そこに行こうとは思っていませんでした。ちょうど私が卒業論文で、有償ボランティアについて書いたのですが、そのときに古川先生に指導で伺ったときに、当時田無市という、今は西東京市という市ですが、そこでボランティアセンターの運営委員会の委員長を先生がご担当されていて、もしよかったら来ないかということでボランティアの勉強ということで連れて行っていただきました。

そこで、大学院進学の話をしていただきました。当時はバブル時代でしたので、公務員を断っても、大学院に行けば何とかかなるかなというように勝手に思ってしまい、そのまま決まった公務員を蹴って大学院に入ったというような形でした。当時、社会福祉を本質的に考えてみたいとずっと思っていましたので、先生のお声掛けが嬉しかったこともあります。

そこで先生からそういった感じでお声掛けをいただいたので、大学院で勉強したいと個人的な素朴な関心もあり、大学院に入学したというのが経緯という形になります。

稲沢：ありがとうございます。熊田さんが入ったのは94年ですね。

熊田：そうです、はい。

稲沢：私は別にプロフィールはないんですけども、私は94年に博士後期課程のほうに入りました。それまで精神障害者の家族会の事務局、相談室、研究所へ勤めてたんですけども、その家族会の顧問が窪田先生だったんですね。あるとき懇親会っていうかに、顧問の先生がたとかをお呼びしてお話ししてるときに、あんた社大で修士出てるの？と。じゃあうち来て博士の勉強しなさいと。

それを私の上司が居る前で言ってくれて、上司は窪田先生に頭上がりませんので、窪田先生が来なさいと言ってるという、だったら上司はうんと言ってる。言わざるを得なくて、それで通ったんですけど。休みをもらうことになりまして。その頃から土曜日は毎週出勤するという形にさせていただく中できてます。なので、私と熊田くんは東洋でいうと同期なんですけど、当然学部出立の修士

と一応社会人も経験している博士ですから、おい、熊田みたいな。飲むと熊ちゃんになるんですけども。

それに対して和気先輩、ですからね。1個ですけど和気先輩っていうのが、怖えとか思ったんですけどね。やっぱり切れ味鋭い論評をされるので、和気先輩。

で、寺田さんは多分私が教員になって着任したときの院生だと思いますけど。なのでちょっといろんな複雑な関係の中で、この場が与えられたということをご理解いただけたらというふうに思います。

では、今いきさつを伺ったんですんですけども、今度に入って、それぞれのゼミがありますが、ゼミでの様子とか、あるいは指導の在り方とか、そういったものについてちょっと、説明していただけますか。

和気：窪田ゼミは火曜日でしたね。2時40分からだったと思いますけれども、私は2時に板橋を出て、5分ぐらい遅れながらいつも出ていました。職場のほうは学際的かつ国際的な共同研究も多く英語で論文を読むことが多かったですし、あと系統的な検索のツールなどもありました。研究テーマは自分が選ぶというよりは、プロジェクト全体のなかでこれをやりなさいみたいな形で決められることも多く、そういう研究をしていて自分を見失っている中で窪田ゼミに参加すると、年齢も、それから勤めている人勤めていない人、いろんな人が居ました。看護系の方も当時多かったですし、学生からそのまま大学に来てる方もいらっしゃいました。

研究の産みの苦しみといいますか、当時の私の印象はすごく素朴なことで悩んでるっていうゼミ生が多いことに驚きました。職場ではあまり悩む暇はない、考える暇もなく、マシンのようになって研究しなければいけない環境にいたのですが、窪田ゼミはそういう一人一人の悩みとか、行き詰まり、研究をどう進めていったらいいか、その研究関心もまだ漠然としているような中で、一体何がやりたいの？というところからみんなが頭をつき合わせて、何とかこれを研究にするにはどうし

たらいいんだろうみたいなことを一緒に考えていたという記憶があります。

先生も一緒に、同じ目線で考えてくださっていて。そのことが後に自分が大学で教えるようになってから役に立っています。本当に素朴な、こういう研究がやりたいんですっていうところから一緒に向き合って、窪田先生のようにはいかないんですけども、純粋な研究の関心をどのように研究につなげていくかを、当時一緒にゼミで学ばせていただいたと思います。

それから自分の専門は高齢者福祉で、職場もそうだったのでそれ以外のテーマを考えたことがなかったんですけども、ゼミでは例えば稲沢先生は精神保健福祉のほうでやってますし、他にも児童とか障害とかいろいろな研究領域を志向してるゼミ生が多くて。そういう領域以外のことについても学ばせていただくことができ、それが後々、都立大学に移ってからの教育という面でも、役に立っています。

ただ、やはり何が一番楽しかったかという、終わった後にご飯屋とか、いろいろな所にご飯を食べつつお酒を飲むことを毎回、先生も付き合ってくださいっていて、そういうところでインフォーマルにいろいろな話ができ、とても懐かしく思い出されます。

特に私の場合は職場がストレスフルな環境でしたので、窪田ゼミは命の洗濯に行くというか、自分自身を取り戻す、自由にいろいろ話し合える場ということで、本当に1週間に1度の午後の時間は、自分にとっては楽しみな時間でした。合宿もいろいろな所に行きましたね。またいつの頃からか古川ゼミと合同の合宿になり、古川先生にはいつも怒られていた記憶があります。

また副査が園田先生と一番ヶ瀬先生だったんですけども、園田先生は間口の広い先生で、園田研究室出身の須田先生も当時同僚だったんですけども、お菓子を食べながらさまざまなお話をさせていただきました。

あと一番ヶ瀬先生は日本女子大で授業をやられていたので、日本女子大まで土曜日に、2週間に1回通っていた記憶があります。そのときに金子先生とも一緒に、厳しい指摘を受けていたとい

うことをこの前聞いて、自分自身は記憶がなかったのですが多方面からご指導いただいていたことを再認識いたしました。

一番ヶ瀬先生からは統計だの何だのとか、あなたはそんなことやっていては駄目よとか、もっと歴史研究をやりなさいと繰り返し言われていて、それを窪田先生がかばってくれてるみたいな構図がいつもあったなと記憶しています。

以上、ゼミなのか飲み会なのか分からないところでの交流がとても楽しかった。あのときのあの経験は、今はなかなか忙しくてそういうこともできないんですけども、先生がたも忙しい中、私たちの飲みにつき合ってくださっていたのは、本当に貴重な経験だったなと思います。

稲沢：ありがとうございます。本当にそうです。窪田先生の最初の図書は『グループワーク』っていう本ですけども、本当にグループワークをゼミでされていたと。みんなの力を生かして、みんなが力を合わせてそういう構図でもいいんじゃないか、ああすればいいんじゃないかって、なんか引っ張り合うような、そんなゼミだったなというのはすごい印象に残っています。園田ゼミはどんな感じですか。

寺田：当時の園田ゼミの様子についてですが、とても自由なゼミで、園田先生をはじめ、ゼミの仲間が温かく迎えてくださいました。今でもゼミ生同士の仲が良く、実は来週も園田ゼミの研究会をこの学校でやる予定があります。年に2回ぐらい、現在も活動が続いてて、熊田さんも一緒に皆で活動するほど仲が良いです。

その雰囲気を作ってくださったのが園田先生で、本当に自由でした。ただし、あまり細かい指導はなさらない分、全体を見てくださり、締めるべきところは締めていただきました。就職してからも、しばしば園田先生から声を掛けていただいたのですが、繰り返し頂戴したお言葉は「社会福祉を一言で言うとなんだと思う？」とか、「キーワードで表すとしたら何？」とか、あるいは「今、あなたが一番興味のある研究者は誰？」というような、研究の核になるような質問でした。

そうすると、普段、園田先生にお会いする機会は少なくとも、もし次にお会いして、先ほどのような質問を頂戴したら何と答えようかと常々考えるようになります。大学院生の時から始まり、就職してからも、「もし、今度の学会で先生にお会いして、『今、あなたの興味があることは何？』とか『社会福祉を一言で言うなら何？』とか聞かれたら何と答えよう」と考え続けるようになりました。それを、365日考えているような感じでしたから、研究にとってもよい影響を与えてくださいました。今ではお亡くなりになりましたが、それでも、「もし生きていらしたら何と答えよう」と考えながら研究しているの、本当にありがたい指導をいただいたと思っています。

稲沢：ありがとうございます。園田先生は2010年の2月に亡くなられてもう4年ぐらいたつんですけども、窪田先生はきょうもありましたが、今年の4月の24日に亡くなられてます。で、古川ゼミはまだご存命なので、今からお話しいただくにしてもお話しづらいと思いますが、まあ触りだけでも。

熊田：古川ゼミの思い出なんですけども、これは他のゼミでもそうだったかなと思うんですけど、例えばマスターの授業にドクターが出ていて、ドクターはドクターだけで授業をする。大体2コマ連続だったと思うんですね。

それで、記憶が間違いでなければ水曜日の古川ゼミでは5限と木曜日の5限にそれぞれ、確かマスター・ドクターの授業がありました。また特に古川ゼミでの特徴の一つというのがやっぱり理論研究会だと思います。理論研究会はちょうど、今でも継続をされていると伺っていますが、当時は大河内から孝橋、それから岡村などの先生方の原著を実際に読みながら、そこを報告して議論していくという研究会でした。

私は比較的就職が遅かったので、もう10年近く出続けさせて頂きました。毎年同じ本を読んでいたということなんですけど、でも毎年同じ本を読んでも、同じように読めませんでした。逆に言うとそれだけ深い議論がなされていました。自

分の、やはり研究のベースになってるところというのは当然、古川先生からのご指導というのもありますけども、理論研究会で読んできた本とそこでの議論も、影響としては非常に大きいです。

逆に言うと理論研で取り上げていた先生方の本を読んでいる大学院生って、そんなに実は居ないんですね。孝橋先生がどういう議論をしているのかですとか、例えば岡村先生の議論は一体何がすごいのかってところというのは、1回読んだだけではやっぱり分からない。それは多分僕は偶然10年間近くそれを読めたということがあります。

理論研では古川先生からの解釈というのがただけなのですが、そこでやっぱりいろんな読み方っていうのを教えて頂きました。毎回同じことをおっしゃらないで、例えば1年目でやったときには別の話。で、2年目だとまた違う角度から話を頂けるというところで、そこですごく勉強になりました。

また理論研究会はだんだん学年が上がっていくと、司会をやったりですとか、あとはコメントーター的なことも行いました。その際に内容に即した切り返しをしないと先生に、「何年読んでるんだ」という感じでご指導いただいたりとかしました。内容に即した切り返しができるようになるというのが自分の中でずっとテーマで、どうやって答えてどうやって返すっていうことを、自分の中で意識的にそれをやっていたんですが、それが役に立ったと思うのが今仕事をする中で、いろいろと外の委員会とか受けることがあるんですけど、いろいろ意見を突きつけられたときに、これをどう切り返すかというところの、そういうところでは意外な私たちではありますが役に立っていると思っています。

そういう意味ではこういう、その場で議論を作っていくとか、難しい内容を内容に即して適切に切り返せるかという姿勢が、自分の中ですごく勉強になったところかなと思います。

で、論文そのものについては、実は私はテーマを、古川先生から「お前はこういうことをやったほうがいい」ということを実は1回も言われたことはありませんでした。これがまず一つ、古川ゼミの特徴でもあるのかなと思います。つまり私には私

の持ち味っていうのが多分あるということだと思います。

実際、私が荒唐無稽な議論をしていても、ほとんど、実は否定を受けていません。つまり古川先生のほうはそこを私の持ち味だと思ってくださって、いずれ私も社会人になって無事に大学に就職した後で、現実とやっぱり向き合わなければいけないとお考えになられていたのではないかと思います。

つまり自分はへりくつな人なのですが、へりくつでいいんだと。正しいことを正しいと言うことが実は現場でもすごく大切な側面があるのだと、ある種思えたことっていうのは、その10年余りの大学院の指導の中で、おまえは現実を知らないから駄目なんだっていうことを1回も実はおっしゃられませんでした。それがおまえの持ち味なんだからそれを活かしていかなきゃ駄目だというようにずっと指導を受けてきたっていうことが、一つ自分の中でもやっぱり大きな学びだったなと思っています。

稲沢：すごくきれいにまとめましたね。さすがです。これを切り返しの。全員の、今はもうなくなってしまった合宿なんですけど、これはじゃあ熊田さんからお願いしますかね。

熊田：合宿も思い出が多いです。合宿は先ほども和気さんのほうからお話があったと思うんですけど、当時はそれぞれ、窪田ゼミ、古川ゼミ、山手ゼミ、園田ゼミということで単独でやっていたものが、少し窪田ゼミと古川ゼミ、それから山手ゼミと園田ゼミということでグループを組むようになって、ちょうど私が大学院に入った頃はもう合同で行われていました。1回目が確か、和田上さんとかがマスターの、古川ゼミに入って1級先輩になるんですけども、その代が初めて1回目の合同ゼミ合宿でやったというように伺っています。私が入ったときはもう合同の、まさにこのセミナーの前身になると思うんですけど、山中湖で合宿をやっていました。

1泊2日の合同合宿で山中湖に向かう時、新宿からバスが出ているので、そこに行くのと院生たち

がパーッと居て壮観でした。車の運転ができる院生が居ると、車で院生みんな山中湖に向かったりというような感じでやっていた合宿でした。

おそらく今回もそうなのですが、稲沢さんですとか和気さんですとか、寺田さんとこのようなかたちで話ができるというのも、やっぱり合宿があったということが大きかったのかなと思います。

当時、例えば稲沢さんが窪田ゼミにいらしたってことは当然知ってましたし、あとゼミが終わった後で窪田ゼミが飲みに行かれていましたので、そこで私もご一緒させていただいたりとかってことはあったんですけども、合宿のときっていうのはほとんど朝まで飲み続けてという、先輩後輩で懇親があったりしました。

勉強もすごいんですね。それぞれの先生の所をレジメを持ってグルグル回って行って、報告を受けてというような形ですとか、それぞれ大学院指導の先生が全員いらっしゃるところで報告をして、ご指導を頂くというような形もあったと思います。

そのときのちょっと忘れられない思い出というのがあります。そのときにいつもゲストの先生をお呼びするってということがありまして、ちょうど私がマスター2年のときにゲストの先生が定藤先生でした。もう今お亡くなりになられてますけども、当時定藤先生が山中湖まで来られて、当時『自立生活の思想と展望』という本をお出しになられたので、その内容について報告・お話をされるということで特別講師に来ていただいた合宿でした。

そこで当時、稲沢さんがまだ院生だったときに、鋭い質問をされて、すさまじい応酬だったと記憶しています。そのときに古川先生が「もう稲沢くんやめとけ」という感じでおっしゃったのがすごく印象に残っています。私はそれを目の当たりにして、「すごいな大学院は」と実感した次第です。つまりその領域で影響力のある先生を前に当時稲沢先生が大学院生だったと思うんですけど、もうものすごい応酬をされているわけですね。それを見てもう、大学院っていう所はすごい所なんだなというように思うと共に、研究や議論の先端が生成する瞬間を学ばせて頂いた気がしています。

当時、修論を書かなくちゃいけないというのがありました。古川ゼミで直系の先輩となりますと

小松理佐子さんですとか、児島亜紀子さんですとかが直系の先輩になると思うんですけど、古川ゼミの先輩だけじゃなくいろんな先輩からいろいろと指導を受けられたというのが、合宿では有難かったです。

稲沢：何も覚えてない。若かったから。寺田さんはどうですか、合宿。

寺田：園田先生のゼミも合同で行われていましたので、今、熊田さんのお話を、もうそのまま、なるほど、そのとおりの思いながら伺っていました。先ほど熊田さんがおっしゃった山中湖のセミナーハウスにも参りましたが、初めて参加したときなどは山中湖畔に行くのだから湖を見るのかなと想像して臨みましたら、全くそういう観光的な要素がなくて、セミナーハウスに直行して、着いたら勉強し続け、終わったらまたバスに乗って帰ってくるという行程に驚きました。環境や場所が変わっただけでやることは学校と一緒にあり、とても衝撃を受けたことを今でも覚えています。

その時、一番印象深かったのは、横のつながりはもちろん、先輩たちとの縦のつながりを深められたことです。とても貴重な経験でした。厳しいご指導をいただいたり、あるいはモチベーションを上げるための励ましの言葉をいただいたりしました。それは博士論文を書いた時にも生かされて、挫折しそうな時にいろいろと貴重なご意見をいただけた先輩たちと出会うことができた合宿は、とてもありがたかったと思っています。

稲沢：大変だったんですけどね。もうできないなと思いますけど。和気さんはどうですか。

和気：さっきも言いましたが、窪田ゼミは合同合宿以外にも別の所にもいろいろ行ったりしていたので。窪田ゼミはもう少し潤いがあって、山中湖は見に行きました。先生と一緒に何人かで散歩して、湖のほとりの喫茶店でお茶したりとか、そういう潤いがあったよかったです。今思いました。

夜は結構楽しかった。特に稲沢先生が意識がなくなっていて、生きているかみたいなの、いつもそ

ういう心配したりしていたこともあったし。合宿以外にも窪田ゼミでは一緒に新潟のほうに旅行に行ったりしたこともあります。施設見学に先生と一緒に電車に乗って行ったりしたこともありました。

あとは記憶に残っているのはゼミではないですけども、都立大に移ってから園田先生の科研費のプロジェクトで、園田先生、山手先生と3人で一緒に飛行機でセントルイスまで行った珍道中が思い出されますね。現地には須田先生が、まだ東洋大に赴任される前で案内役になっておられ、窪田先生と稲沢先生も合流されました。日本各地、世界も含めていろいろな所を回りながら、いろいろな学びをしたということですね。

教室の中でのゼミもありましたが、それ以外の場所でさまざまな合宿もどきの活動とかイベントがありました。今はなかなかやる暇がないのはなぜっていう感じですけど。そういう時間が自分自身にもなくなり、大学院全体の業務自体も忙しくなってしまって残念です。昔はそういう人間的な交流の時間があり、とても貴重な学びの場だったと思います。

稲沢：はい、ありがとうございます。ほとんど思い出しかないということなんですけども。ちょっと研究的なことで、学位論文の執筆なんていうのは？ 和気さんから。

和気：私の場合は昼間は研究所に勤めていたので、一応研究が仕事だったんですけども、博論は自分のテーマでということだったので、一部重なってはいたんですが、禁じられていた事例研究班とかいうのを作って、勝手に事例研究を始めました。全体の調査にも組み込んでもらえるようになり、柔軟な研究を許容する環境にもなっていったんですね。

博論を書いたときは結婚をして相手も仕事が忙しかった。子どもは当時は居なかったのですが、職場まで1時間ちょっとかかっていたので、取りあえず職場の近くにウイークリーマンションを借りて、徒歩3分ぐらいの所に住んで、夜は6時までには職場の仕事をし、そこからさあやるぞって

う感じで夜1時ぐらいまで自分の論文を書いて、1時ぐらいになると帰宅。研究所は病院に併設されていたので、病院のほうの出口から守衛さんにもいつもお疲れさまですとか言われながら帰っていました。

とにかく通勤時間の2時間をなくして、時間内に書き上げなければということで取り組みました。そんな生活を半年間続けていたので、本当に夫にはなんの家事もせずに勝手なことをさせていただいてとても感謝をしなければと今あらためて思います。そんな形で職場とただ寝に行くだけのウイークリーマンションの生活でした。

また、ある程度書き上がったものを次に書く予定の方に読んでもらうことを窪田ゼミの伝統にしようということで、私の論文は稲沢さんに読んでもらった記憶があります。

稲沢：そうだった。

和気：どうなんだろうみたいに言われた記憶があるから。まあいいやと思って、完全に無視して出してしまいましたけども。そんなことで論文を書くのは、これは仕事をしていなくても、環境を整えて半年間ぐらいは別世界に生きていないとなかなかできなかつたかなというふうに思っています。

今はなかなかできないので、皆さまもあるとき、やらなければいけないときにはぜひ周囲の方にも協力を得て、周りの人もサポートをしてあげて、そういう機会をサポートできるような体制があれば書けるのではないかと思います。

稲沢：今お話になったように、窪田ゼミでは書いた人が次の書きそうな人に校正を頼んで、誤字脱字のチェックも含めて、大体このレベルなんだっていうのを後輩に伝えるっていうのを、平野さんっていう人と結城さんっていう方と和気さんで。そのときは私だったんですが、私が締め切りぎりぎりまで書けなかったもので、私でその伝統は絶えてしまいました。すいません。校正してもらう余裕がなかったんです。なので私のときに止まってしまいました。すいません。寺田さん、どうですか。

寺田：園田先生は本当に自由にさせてくださり、放任主義で遠くから見守るスタイルのご指導だったと記憶しています。

特に何か指示されることもなかったのですが、まず自分で博士論文の前半はこんな感じかなという下書きを書いて、一度先生にお持ちしてみました。そうしましたら、園田先生が「わかりました。読みます。」とお引き受けくださったのですが、しばらく経ってもそのままなので、とりあえず後半もまた自分で書き始めました。ところが、後半を書き進めるに従い、前半を修正する必要が生じました。そこで、後半を書き終えた段階で園田先生に「申し訳ありませんが、後半を書き終え、前半と後半を合わせましたので、これを、以前に提出した前半の下書きと差し替えさせてください」とお願いしました。すると、園田先生は「せっかく前半を読み始めたところなのに・・・」とがっかりなさり、そして、「一言一句変えずに、もうこのまま博士論文として出すというものが書けたら持ってきてください。それで審査にかけて駄目なら、全く別のテーマで一から書き直すというくらいに出来上がったら持ってきてくださいね」とおっしゃいました。そのような次第で、本当に自由に書くことになりました。もちろん副査の先生からご指導をいただきましたし、口頭試問では温かなご助言もたくさん頂戴しましたが、基本的に園田先生ご自身は放任主義で、自由に論文を書かせてくださいました。

稲沢：はい、ありがとうございます。熊田さんはどこまで頑張りましたか。まあ、頑張ってるんでしょうけど。

熊田：頑張っただけですけど、出してはおりませんので、そういう意味ではここで語る立場にはないですね。

稲沢：どこまでは行った？

熊田：ぎりぎりねばったのは・・・どこまでですかね。2割とか3割ぐらいですかね。

ちょっと書いて少し先生にお持ちするということは一時期あったんですけども、当時、今の就職が決まって1年か2年たちますけども、この仕事に就くということの意味が全然私も理解してなかったのです。仕事に就いたら時間あるだろうと勝手に思ってたんですけど、全然時間がないということに気付きました。

これは私がこのような所で言うようなことではないんですけども、やはり居たときに書けばよかったと思っています。書けたかどうかというのは定かではないですし、いたから書けることではないと思いますけど、ただもう少し自分の中で自覚を持つべきだったってことが、自分の中での反省です。

稲沢：修了してからもう10年以上たつわけですけども、研究者としての基礎。東洋大学で学んで何か身に付いたことってというのは、どんな感じですか。熊田さんからお願いします。

熊田：今、武蔵野大学という大学に勤めているんですけども、その中で、例えば今いわゆる教育とか研究の職場においてる者としては、結構誰がどこの大学を出て、大学院を出ていて、誰の指導を受けてたかっていうことに大切にしています。

お名前はちょっと具体的には挙げられませんが、例えばうちの今の同僚のメンバーでは明治学院ですとか、あと社大、それからあとは駒澤ですとかそういった、何人かメンバーが居ます。

その中で誰の指導を受けてきたかっていうことが、意外に話の中で出たりとかしたときに、自分は東洋大学で古川先生にご指導をいただいたということを言うと、やっぱり理論研究ですかということで、割とそういう感じで見られたりします。そのときに自分が学んできた足跡というか、必ずついて回るということは実際あるんだということがすごく感じる場所ではあります。

そういう意味で私は地域福祉っていうことを研究領域にしてるんですけども、その中で古川先生を、例えば指導を受けた地域福祉っていうのは一体どういう地域福祉なんだということなどを、よく聞かれることもあったりします。その中で

自分がそこに明快に答えられるかどうかというのは分からないんですけども、そこはしっかり引き受けてと言ったらちょっと不遜ですけども、しっかり受けとめて研究していきたいということがまず一点です。

あと他の大学院を出られた方との違いというところで考えたときに、やっぱり一つは、先輩後輩のつながりっていうのが意外にない大学院の方が多いというのが驚きでした。名前は挙げられませんが、ある大学院出身の方だと先輩と後輩の付き合いはほとんどないですとか。ましてや、例えば自分をご指導いただいたゼミ以外でのつながりは、普通はほとんどあり得ないという話を聞いています。

そう考えたときに同門の中での先輩後輩のつながりというのはもちろんなんですけども、ゼミが違うんだけれども、そこでのつながりから学んでるっていう縦と横のつながりっていうのが、すごく東洋で学んできた、大学院としての一つの特徴なのかなというのはすごく感じるころではあります。

稲沢：寺田さんはありますか。

寺田：私も熊田さんと同様につながりの強さを感じています。主査として園田先生、副査として古川先生と佐藤先生に教えていただきましたので、熊田さんには園田ゼミの研究会に来ていただく一方、私は古川先生のゼミにも参加させていただきました。今でも毎年、日本社会福祉学会の後に、古川ゼミで懇親会の席を設けてくださるので、いつもお邪魔しており、懐かしい先輩や仲間たちと会う機会を与えていただいています。

そういった横のつながりが、他の学校では珍しいと聞き、感謝していますし、また、今の職場でも結構、東洋大学の卒業生がいらっしや、大規模大学だからこそそのつながりが想像以上であって、ありがたいと思っています。

また、何でもやる姿勢が身に付いたということにも感謝しています。例えば、最初に就職させていただいた学校は、天野先生と森田先生にご紹介いただき、保育系の養成校でした。しかしながら私は、

すみませんが児童福祉を実はほとんど知らない状況で社会的養護や児童福祉などを教えることになり、慌てて勉強しました。本当に失礼な話ですが、正直、必死でした。

ただし、その経験が今でも非常に役に立っており、「大丈夫、何とかなる」という姿勢や自信が身につきました。それは、もともと放任主義の園田ゼミとか、そういったところで自分の力で何とか切り開くということの大切さを学んだように思います。今の職場でも、多様な仕事をいただいているのは、そのときの経験が役立っているように思います。

稲沢：はい、ありがとうございます。では和気さん、どうぞ。

和気：やはり私自身は修士課程がアメリカだったので、そういう意味で仲間が全然居ないと環境で、このままではソーシャルワークも社会福祉のアイデンティティーもないというときに、窪田ゼミの仲間と出会って、研究は1人でやるものですけども、仲間が重要だということをあらためて感じています。

窪田先生とお話ししたときも、先生もアメリカでソーシャルワークを学んで帰ってきて、やっぱり仲間が必要だということをつくづく感じていたというお話で、意見が一致したことがあったんですね。

窪田先生はちなみに、20代の頃、一番ヶ瀬先生や日本女子大の小川先生らと同じ釜の飯を食べて、研究会をして仲間を作ったっていうような話も聞いて、やはり研究をしていくのは1人だけれども、仲間の存在というのが見えないところですごく大きな力になっているなというのを感じます。それは研究者としての土台になるのかなと思います。もちろん指導教官の先生の存在も非常に大きいですけども。

それからあとは窪田ゼミでの先生のいろいろなグループワークとか、教え方みたいなものを見てつくづく思ったのは、やはり研究も生活がきちっとあってこそできるものなのだという事です。それぞれ学生さんは生活費に困っていたり、家族

が病気だったり、自分自身も職場で悩みがあったりとか、研究だけを順調にやっている環境ではなくて、悩んでいる。自分だけではなくてゼミの仲間にもそういう人たちが居たときに、先生はそういう生活全体をひっくるめてサポートして下さっていたなというのをすごく感じています。

中には生活費を少し支援してもらって何とか生き延びたって人もいます。人それぞれ、生活自体が困難になるときに、いかに研究が継続できるようにそれぞれの生きている場所でその人らしく、人生を研究だけではなくて多様な形でサポートして下さっていました。研究の基礎というのは、やはり生活とか人生の基礎でもあって、長いスパンで2年間とか3年間だけではなく、卒業してからも、入学する前も含めて、長い目で育ててくれ、研究の環境までを含めてサポートして下さる、それが窪田ゼミにはもちろんありましたし、東洋大学全体にもそういう雰囲気があったかなと思います。

稲沢：はい、ありがとうございます。何だか、古き良き時代的な話になってきて、今はなかなかそういうふうに濃密な付き合いができない。先生も忙しいとか、いろいろあるんだろうとは思いますが、そういうことによってできたつながりっていうのが結局、教員とか研究者って孤立してるっていうか、一人商売みたいなところがあるんですけども、そういうときに、なんかの折に支えてくれたり。

年に1回2回しか会わないにしても、そこですぐなんでも言えて。例えばそのときに研究、今こういうのを考えてるって言ったら、ズケズケ本音で、それってそういうことなんじゃないか、こうやったほうがいいんじゃないかみたいなことをすぐに言えちゃうっていうの、そういうつながりがあるっていうと、やっぱり研究者として、あるいは教員としてなんか支えになるなど。そういう意味では東洋大学でそういう基盤を作ってもらったっていうのは、今聞いてて思いました。

それともう1個、何でも屋になったって言われたんですけど、それは東洋の文化です。誰とは言いませんが、某森田先生が私が東洋に着任した後、

ある先生方を何人か採ったんですけども、はっきり言うと高山先生とか、小沢先生とかを採ったんですけど。どう見たって科目が違うんです。担当科目が。え？って。「先生、これでいいんですか」って言ったら、「学部の授業なんて、何だってできる。当たり前じゃないの」ってしらっと言いましたから。私はあれがすごいショックで。何でもやるんですかって。

普通だと私の専門はこうですって言って、学部であれ、大学院であれ、それなりに狭めてやるのが普通だと思うんですけど、「そんなの、何だってできるわよ」って言われたときには、これは東洋の文化なんだなというふうに察して。だからこそ横断的に、例えば、さっきも話がありましたけど、窪田ゼミなんていうのは分野なんていうのはもうばらばらでしたから。理論もあれば、障害もありや、高齢まであって、もうばらばらでしたから。そんなのは関係なくそこで議論するっていう、そういう何でもあり的な姿勢があったかなっていうふうには思います。

今のゼミがどうなってるか私も分かってないんですけども、そういう意味で言うと異種混合的な、まさに何でもありなところがあるんじゃないかなというふうには思います。じゃあ、あと10分で終わりなんですね。

稲沢：じゃあ最後になりますけども、もう東洋を出て、研究者としてもですし、教員としての立場もあると思うんですが、私たちが院生として指導を受けてきたのが、今は逆に指導する立場にあると思うんですけども、東洋で指導を受けて、今の自分の院生、学生指導にどういうふうに反映されているというふうには実感する時があるとか、ないとかっていうのは、いかがでしょう。ちょっと抽象的で申し訳ないんですが、これで多分最後の発言になると思いますので、感想も含めて言わせていただくと。

和気：さっきも申しあげましたが、留学生の学生さんで、「口座にあと90円しかないんです」という方がおられました。そういうレベルのところから、いろいろな知恵を働かせて、生活や人生全体をサ

ポートしてあげるっていう教育方法みたいなものは、指導教官である窪田先生から教わった部分が大きいかなというふうに思います。

あとはどんな学生さんに対しても同じ目線で悩んであげるとか、懐が深く、研究方法論だとか社会福祉じゃなきゃ駄目とか、いろいろなことをあまり押し付けない、そういう自由な学びの場、機会を提供してあげるように自分としては心掛けてはいるつもりです。まだまだそういう先輩、先ほど鼎談Ⅰで登壇されたような先生の足元にも及ばないのは当然なんですけれども。

特に都立大、首都大学は小林先生のように大学院の礎を作られた先生方もおられ、そういう先生方の作ってきたものをしっかり受け継いでいかなくはと思いつつやっています。

稲沢：ありがとうございます。全体っていうのは思いますね。なんかあんまり切り取らない。懐深いってところがあるかなっていう気がしますね。では寺田さん、お願いします。

寺田：私もそのような間口の広さのおかげで、この大学院で社会福祉領域の研究として認めていただきましたことを感謝しています。そのため、私自身も学生さんに対して、「それは私のテーマではないから引き受けられません」というようなことを絶対に言わないようにしようと思っています。園田先生は、そういうことをおっしゃいませんでしたので、そこをまず考えます。

それから本当に小さなことかもしれないのですが、研究室に伺ったときに、園田先生は決して嫌な顔をなさらなかったことも、見習いたいと思っています。とても多くの院生を抱えてご多忙でしたが、どれほどお疲れでも、厳しい表情や冷たい対応などをなさることが全くなくて、いつもにこやかな笑顔で研究室に迎え入れてくださいました。今は、自分が教える立場になり、学生さんに研究室へ来ていただく側になりましたが、常に園田先生と同じような対応をできているかと言ったら自信がありません。締め切り間近の原稿に追われているときに、学生さんに研究室へ遊びに来てもらっても、もしかしたら、きつい表情になっているか

もしれません。そのため、そうなってはいけないと戒めるようにして、できるだけにこやかな対応をしたいと思っています。本当に小さいことなのですが、心掛けていきたいと思っています。

稲沢：大きいことだと思いますよ。ちょっとズキンとききました。じゃあ熊田さんお願いします。

熊田：今1人、大学院生の指導を担当しています。その中で「したい研究を支えることの難しさ」ということは、例えば私も院生時代に、今比較的自由な授業というのををさせていただいたと思っ

ていますが、それを逆に自分が、例えばその学生さんが自由な研究をするといったときに、支えるのってこんなに大変なんだと痛感しています。つまりそれなりの知識とかバックグラウンドがないと、したいことを支えることができないんですね。それは勝手なことをさせてるわけではなくて、ちゃんと分かった上で支えることの難しさも今ひしひしと感じています。

そこは実際にできているってわけでは当然ないんですけども、自分も、その学生さんがやっぱり書きたいものとか、考えたいことを支えるということができればしたいなどは思っていますので、それをするためには自分なりの研究者としてのバランスがちゃんとないと駄目なんだということを、今あらためて感じているということもあるんです。

あとコミュニケーションの場っていうのは大事にしたいとも思っています。私の場合は飲みながらというのが多いと思いますが、体が続く限りではあるんですけども。

ただ飲む飲まないに関わらず、コミュニケーションというか、うまく縦とか横のつながりっていうのはやっぱり大事にしたいなどは思っています。

稲沢：ありがとうございます。特に何かまとめができるっていうこともないかとは思いますが、窪田門下の1人としてちょっとお時間いただきたいんですが。私も博士論文を書くときに3年目の6月の終わりぐらいでしたか。もう書けない、テーマも分からないし、なんかもうああってなってしまうまして、先生の所に行って「もう無

理です」って言ったんですね。そうしたら「まあまあ、座りなさい」と。で「どんなことを考えてるの」と言って引き出されるわけです。ああだこうだ。そうしたら「あ、それいいじゃん」「それ行けるわ」って持ち上げる持ち上げる。それはすごいんですよ。で、私も持ち上げるなど分かっててもやっぱり気持ちがいいもんだから、「分かりました」と。じゃあとにかく今まで書いた論文とかを集めて、「ちょっとまとめて持ってきます」って言って2、3週間で今まで書きためたものとかをバチバチ集めて、あるいは書き足したりして、持って行ったんですね。

そうしたらもうA4で80枚とか100枚近くになってましたので、これだけあればもう論文なんじゃないって思って出した。そうしたらパラパラッと見て、「これは論文じゃない」「これは単なる報告書だ」。え？そんな、あんだけ行けるって言ったじゃん、って。突き落とされてました。

ところが人間って悲しいですよ。80枚あると思うと、これは何とかしたいじゃんとか欲が出てきて。だけどそこはもう完全に見抜かれてまして、そこから和気さんがマンション借りて書いたじゃないですけども、ちょうど2年目に長野のほうで大学の教員になったので、もう夏休みは朝から晩までずっと研究室にこもって。そのとき途中で熱を出したんですけど、やめるっていうわけにもいれないから、点滴打ちながらでも書いてた。皆さんそれぐらい必死になるときってどこかにないと書けるものじゃないかと、今でも思うんですが。

言いたいことはその後なんです。窪田先生は去年1月に『福祉援助の臨床』という本を84歳でお出しになったんですね。で、何で84までかかったかっていうと、すごい時間がかかったんです。もう東洋を退任されてから周りの目は書けよっていう、弟子たちの目はとにかく残していただかないと駄目だよっていうのを、ずっと言ってプレッシャーをかけてたんですけども。ご本人はお年を取れば取るほど、もうこんなこと言ってもしょうがないとか、こんなことを私が書かなくなつて、誰かが言ってるとか。別にそんなことないから、自分では、先生はオリジナルだからって言って、もうさっきの話です。褒めて褒めて褒めつくして、

さっき言ったように。

10年以上かかったんですから。もう研究会まで作って書いてもらおうとしたこともあったんですけども、3回ぐらいで頓挫し。原稿も一回一回は出てくるんですけども、また引っ込められ、なんていうことを10年やったんですが、あるときなんか進んだんでしょね。60枚ぐらいの原稿が出てきたんです。それが一昨年の夏ですね。夏明けぐらいだったんですけど、そこから私も手のひらを返しまして、これおかしい、みたいな。これ違うと思うよって。さっき古川先生が引用が非常に少ないっておっしゃったんですけども、削ったんです、私が。先生がここで引用してるのを、いまさら知識をひけらかすために引用してもしょうがないんで。先生の言葉が私たちは読みたいから、誰それがこう言ってるなんて話はもう最小限にしてくれていうことで、一番核になるサリバンの生の営みの困難につながる言葉なんですけども、サリバンとバイスティックとコノブカと、その辺はいいでしょうけど、日本人とかやめてくださいとかって言って、全部落としちゃったのでそっけない。

でもその分、窪田先生の言葉で最後まで書いてもらえたなどというのはいまだに思ってますし、本当に先生は照れ屋なのか自信がなかったのか。今の本では一番最後にそれこそミクロの思想っていうのが出てるんですけども、あれをあらうことか初めに持ってきた、最初。先生、やめてくださいと。すごくいいこと言って、自信があったから初めに持ってきたんですね。なので、やめてくださいと。

これこそが締め言葉になるんだからって言って、それはそのとき聞いてくれて一番最後に回してくれたので、ちょっとはお役に立てたんじゃないかなというふうに思ってます。なので、人はいずれはということになりますので仕方ないんですけど、この本を残してくれたっていうことが私にとってはやっぱり、それを手伝えたっていうことが私にとっては一番の恩返しになったかなというふうには思ってます。

自分の業績よりも先生の本を残すことのほうが、多分私にとっての業績になるんじゃないかと、書きたいって、本当に思ってます。締まりのない話

になりましたけども、そうやって受けたものを先生にお返しすることができたっていうことは、私にとってはすごい幸せなことだというふうには思っているところです。というわけで、ちょうど時間となりましたので、きょうは3人の方に、ずっと長い付き合いの知り合いなので、ちょっと会話的にはくだけちゃったかもしれませんが、緊張感がなかったかもしれませんが、そういうところが結局東洋の大学院で培われたつながりみたいなものなんだと。その一端をご紹介できたんじゃないかというふうには思います。本当にきょうはどうもありがとうございました。

進行係：稲沢先生、3人の先生がた、ありがとうございました。年齢順に並ぶとなると、私はちょうど真ん中なんですよね。そういった意味でもこの大学の教育に携わっているものとして、大学、大学院の教育を何とか私たちもできるように頑張っていきたいなというふうに思います。本当にありがとうございました。稲沢先生と3人の先生がたにもう一度拍手をお願い致します。